

ピロリ菌と胃がんについて

ピロリ菌と胃がんについて

胃がんの一番の原因としてピロリ菌感染というものがあります。ピロリ菌はヘリコバクター・ピロリという細菌の略称であり、西オーストラリア大学のウォーレン博士とマーシャル博士が1979年に初めて報告をし、1982年にピロリ菌の分離培養に成功、後に2005年のノーベル医学生理学賞を受賞することになります。ピロリ菌が感染すると胃全体が赤くなり、ヒダが太まり、胃粘液が増加してねっとりした粘膜になります。次第に粘膜が薄くなり「萎縮」した状態であり、これを萎縮性胃炎と呼びます。この状態が胃がんの畑になってしまうのです。

ピロリ菌は胃がんの原因であり、除菌により胃がんを減らせる

ピロリ菌は慢性胃炎の原因ですが、胃がんの原因であるということが重要です。ピロリ菌以外に胃がんの原因であると結論づいたものはありません。ピロリ菌と胃がんの関係をきちんと証明したのは日本人の先生で、ピロリ菌感染者の2.9%に胃がんが発生したのに対し、ピロリ菌非感染者からは1例も胃がんが発生しなかったことを根拠に、ピロリ菌は胃がんの原因であると結論づけました。その後、2008年に北海道大学のグループが、ピロリ菌を除菌することで胃がんの発生が抑制されることを初めて報告しました。

ピロリ菌感染の証明方法

内視鏡検査で「萎縮性胃炎」があった場合、100%ピロリ菌がいるかということ、そうではありません。次にピロリ菌がいるかどうかを証明するための検査が必要です。検査の方法は、主に3種類で、1つでも陽性であればピロリ菌が現在感染していることの証明になります。

看護師への復職を考えている方へ **潜在看護師の復職支援研修**を行っています。大村市医師会にご相談下さい。

注意点としては、いずれの検査もまず内視鏡検査を受けて萎縮性胃炎（慢性胃炎）があることが証明されないと保険適応にならない、という点です。

1. 血液検査（ピロリ菌抗体検査）
 2. 呼吸による検査（尿素呼気検査）
 3. 便検査（ピロリ菌抗原検査）
- いずれもメリットデメリットがありますので、状況に応じて検査方法を選択することになります。

ピロリ菌の治療法

ピロリ菌の除菌は1週間、3種類の薬を内服するだけで済みます。3種類のうち2種類は抗菌薬（抗生物質）、1種類は胃酸を抑えるための制酸薬です。この20年ほどでピロリ菌の除菌薬の組み合わせが工夫され、最新の方法では除菌の成功率は約90%にまで改善しました。1回目の除菌療法に失敗した場合は、2回目の除菌療法も保険で受けられます。ぜひピロリ菌を早期に治療して、胃がんになりにくい生活を送りましょう。

澤田胃腸科内科医院 副院長 澤田 昌幸



【医心伝心】

長い夏が終わり、やっと秋らしくなってきました。風が心地よく感じられます。夏場は熱中症予防のために屋外での運動を制限せざるを得なかった人も多いでしょう。スポーツの秋、運動を再開してみませんか？